



星の子供たち

毒吐き道化

西暦30xx年。地球では第三次世界大戦が勃発し、日本は大国アメリカに大敗した。 敗戦国である日本は世界に報復する為、密かに水面下でのとある計画を始動した。

――『星の子供計画(star=children=project)』

それは戦闘に特化した生命体を造ることを目的とされた――

*

「わああ！ 超格好いい！ 『星の子供』だ！」と、金髪の少年が目を輝かせた。両目の下にある刺青が印象的な、活発そうな少年。

瞬間、その少年の頭を女が拳で殴る。

「ったく……リヒト、お前。うるせえ、黙れ」と何とも荒い口調で女は言う。

大きなサングラスで隠れている為わからないが、その表情は苛立たしげにしているようだ。煙草の煙を吐き出しながら、溜息をつく。

「痛いな！ 何すんだよ、ババァ！」

無論、もう一発くらうことになるリヒトなる少年。頭を押さえて、恨めしそうに女を見上げる。

「まったく、星の子供の何がいいんだよ。我が子ながら本当に馬鹿な子だ……」

またもや女は煙草の煙を吐き出しながら、大きなため息をつく。

「いやだってさ、ヒューンって飛んで、ババーンと華麗に戦って……うん、格好良すぎ」

リヒトは目を輝かせながら、身ぶり手ぶりを交え熱弁する。

二人の前を飛んでゆく『星の子供』は確かに子供の憧れの対象になるかもしれない。

しかし、何物にも興味を示なさそうな無表情なそれは、ヒーローになるには何かが物足りない気がした。

「これだから物を知らないガキは……」

「それ、実の子に言う台詞かよ！ 好きなものは好き……」

口を尖らせるリヒトの言葉を遮り、「リヒト、一つだけ言っておくけどよ」と、リヒトを見つめ「あいつらは所詮造られた存在――どんなに憧れたってあいつらはお前に興味なんて持たない。あいつらに関わろうとするな」と、真剣な口調で女は言った。

「――わかってるよ」 少し不満げながらも、リヒトは素直に頷いた。

*

「まったく、役立たずだね……」

「本当にどうしようもない」

「――分解してしまおうか」

研究員たちは嫌悪感を隠さずに言い放った。

――それは本当にわからないほど微かに表情を歪めた。

――いやだ。

その中に『拒絶』が現れた。同時に自由に対する『熱望』も生まれた。

「殺されたくない」

それは確かに自分の思いを口にした。そして静かに、しかし力強く涙の零れるその瞼を開いた。瞳の中には輝く紫の星が映っている。

その『星の子供』は持てる限りの力を振り絞った。頭の中で、その血管が切れてしまうのではないだろうか、という錯覚に陥るくらいに。

――死にたくない。

「おい！ NO. 13が逃げたぞ！」と研究員たちは騒いだ。

それにはそんな雑音など、どうでも良かった。

*

「は一、アイデアの奴、うるさいよな一」と、リヒトは母への不満を呟いている。

「まあ、アイデアも俺のこと心配してくれてるんだろーけどさ」

そう呟いていると、リヒトの耳に何か弾けるような、微かな音が聞こえた。

「何だ？ この音」と、呟いた刹那。

――目の前に、黒髪の少女が突然現れる。

現れた瞬間、少女の瞳から紫色の星が消えて弾ける。少女は臆病な瞳で少年を見た。

リヒトにはその少女が一体何なのか、すぐに見当がついた。

――星の子供。

星の子供は能力を使う時、瞳に星が浮かぶ。それが星の子供の証。

そして、この少女には――確かに瞳に星が浮かんでいた。しかも、少女の左目の下にはNO. 13という文字が存在している。それは、星の子供の製造番号だった。

「も、もしかして、星の子供？」

リヒトは歓喜の声を抑えながら少女を見つめた。

「あ、う……」

少女は、しまったとでも言うように目をぐるぐるとさせた。あせっているようだ。

そして、すぐに方向転換をしてリヒトの前から逃げようとした。

「待って！」

思わず少女の手を掴むリヒト。即座にリヒトの脳裏に浮かぶ、アイデアの怒る表情。

「あ、の。俺、別に悪い奴じゃないよ！ ただ、『星の子供』に憧れててさ。だから一度話したかったんだ！」

リヒトは早口に言いたてた。少女は目をぱちくりとさせながらリヒトを見つめる。

「私には、憧れられるような力……ない。存在価値、ないんだもん。役立たずなんだもん！」

少女の臆病な瞳に、微かに意志を感じた。

今度はリヒトが目をぱちくりとさせた。そして、「自分で自分のこと役立たずとか言うなよ！ 生まれたからには意味があるんだからさ！」と、大きな笑みを浮かべ、少女をしっかりと見つめた。

少女は驚いたように、その目を大きくした。そして、小さく頷く。

「お？」と、リヒトは声を上げる。少女は首を傾げ、リヒトを見つめた。

「ごめん、アイデア……いや、母ちゃんからだ」

リヒトは左手につく腕時計のようなものを見つめた。微かに振動している。

「リヒト、さっさと帰って来い。政府から家に引きこもっとくように全国民にお触れがあったから……道草するんじゃないぞ」

とても不機嫌そうなアイデアの声が、リヒトの腕時計から流れる。

「何でさ？ 何か危険なことでもあったわけ？ 別に今は戦争とかねえじゃん」と、リヒトは口を尖らせた。

「――星の子供が一体逃げだした。市民を攻撃する恐れがあるとか言ってるから、さっさと戻れ」

アイデアの声は途切れ、二人の間に生まれる静寂。

リヒトは目の前の『星の子供』をまじまじと見つめた。

「もしかして――逃げ出した星の子供って」と、言葉にする。

少女は怯えた瞳でリヒトを見つめた。どうしていいのかわからないようだった。

「い、いや。研究所には戻りたくないよ！ 分解されちゃうよ……」

何ともか細い声で訴える少女。青ざめた顔は、死に対する恐怖に満ち溢れている。

リヒトは口を閉じ、静かに少女を見た。大きな瞳が、少女の瞳を映す。

「——名前は？」

屈託ない笑顔を浮かべて、リヒトは訊ねた。

予想外のリヒトの反応に目を見開く少女。リヒトの意図が読み取れない様子だ。

「そんなの、ないよ。NO. 13としか呼ばれてないもん」と、これまたか細い声で少女は言った。

「え……」と、リヒトは一瞬寂しそうな顔をした。しかし、それもつかの間。すぐに、「じゃあ、イエロなんてどう？ 最近読んでる漫画のヒロインの名前なんだけどさ」と、口を開いて微笑んだ。

これまた少女は目をぱちくりとさせて、リヒトの瞳を見つめ、顔を赤くしながら小さく頷いた。

リヒトはいかにも悪戯心に溢れた少年の笑みを浮かべた。そして、何か新しい悪戯を思いついた幼子のように、少女の顔を覗き込むのであった。

*

「ただいま、アイデアー」と、リヒトは大きな声を上げた。

「馬鹿リヒト。親の名前を呼び捨てにするんじゃないよ」

苦虫を潰すような表情で口もとの煙草を噛むアイデア。そして、気付く。

「リヒト。そいつは、誰だ？」

アイデアの目はサングラスに隠れているが、声色を読み取っても機嫌が悪いのが手に取るようにわかった。その目はリヒトの後ろにいる少女を睨んでいた。

少女は微かに肩を震わせた。

「え？ と、友達だよ」

わずかにリヒトの声が上ずる。

「——それは違うな。そいつは、『星の子供』だ」

アイデアの表情はとても厳しいものとなった。啞えていた煙草の火を潰し、真剣な様子で二人を見る。

「——そうだよ。それが何だよ！」

リヒトは叫んだ。まるでイエロを守るかのように、大きく手を上げる。イエロは怯えた瞳の中に、微かな安心感を浮かべた。

「イエロは悪い奴じゃねえよ。少ししか話してないけど、それだけは確かだ！」

「何でそんなことがわかる？ この世に確かなものなんて存在しない——通報するぞ」

厳しい口調で言うアイデア。リヒトも火花を散らすようにアイデアを見上げ、睨む。

「行くぞ、イエロ！」

リヒトは踵を返し、イエロの腕を引っ張った。そして外へ飛び出す。

「待て、リヒト！」

突然の行動を止められなかったアイデア。苦悩の表情を浮かべ、リヒトが飛び出して行った外を見つめる。

「馬鹿リヒトが……」

それは、確かに子供を心配する親の目であった――

*

「いいの？ リヒト……」

イエロは心配そうな表情で、リヒトの顔を見る。

「いいんだよ、別に。それよりもここなら見つからないよ。ここは俺の秘密基地だからさ」
歯を見せて笑うリヒト。悪戯っ子の笑みを浮かべている。

「うん……ここなら、大丈夫そうだね」

イエロは辺りを見渡した。そこは、昔の日本で使われていた下水道。今は簡単に水の浄化が出来る為、今では下水道は使われていない。

「もし政府の奴らがやってきても、走り回っちゃえばすぐに撒けるだろうし」

「うん」

「それは、どうかなあ？」

突然、二人の耳に入る耳ざわりな声。女とも男とも取れないような、不思議な声がある。

「だ、誰だ！」

リヒトはイエロを庇うように腕を広げ、辺りを見渡す。声のする方は、とても暗い。しかし、それはすぐに視界に入った。

「やあ、十三番。君はダメな子だね。勝手に逃げ出しちゃだめだよ」

ニコリともせず、それは言った。髪の毛も、瞳も、肌も――全てが白いそれ。そして、左目の下にはNO. 2と書かれていた。

「ホントに馬鹿だなあ。僕には『追跡』の能力があるんだよ？ どこに逃げても無駄さ」

「あ……あ……！ 逃げて、リヒト！ 私じゃ、NO. 2には勝てない……けど、足止めくらいは出来るから……」

今度はイエロがリヒトを守るように、両腕を広げた。そのか細く、白い両腕は微かに震えていた。

「馬鹿だな。僕に勝てるわけないじゃん？ どうせお前には何の能力もないんだろ？ 僕は――星の子供の中でも最強なんだから、さ」

愉快そうな口ぶりに、無表情なそれ。生きている感じがしなかった。

「イエロ」

真剣な目でイエロを見るリヒト。がっしりとイエロの手を掴んだ一刹那、二人の目の前は真っ白い光に包まれた。

*

「あ、れ？」と、イエロは呟いた。目の前にNO. 2はいない。

「イエロ。あいつに瞬間移動能力はある？」と、リヒトはイエロに訊ねる。

「ううん、ないよ」

イエロはそう呟き、「でも、どうしてリヒトも瞬間移動してるの？ 私、他の人まで瞬間移動させる力ないよ？」と、微かに怯えているように肩を震わせた。

「それは、イエロが俺のこと心配してくれたからじゃない？ だから、二人とも瞬間移動出来たんだよ！」

無邪気に笑うリヒト。その笑顔を見て、ようやく安堵した笑みを浮かべるイエロ。

下水道の奥の方までやってきたらしい。

「けど、あいつに瞬間移動能力がないんだったら結構逃げ回ってられそうだな」と、言葉続けるリヒト。

「――リヒトは家に帰った方がいい。リヒトまで巻き込みたくないよ」

悲しそうな表情でイエロは言った。

リヒトは大きく目を開けて、イエロを見て笑う。

「何言ってるんだよ。俺、星の子供に憧れてるんだぜ？ しかも、人間になんて興味なさそうに見えたのに、しっかり感情持ってるのもわかったんだから――仲良くしたい」

その澄んだ瞳に浮かぶ友好の色。

しかし、その言葉を聞いて肩を震わせるイエロ。とても悲しそうな、辛そうな瞳でリヒトを見る。

「私、分解されそうになったの――感情があるから。他の星の子供には感情がないのに、私には感情があったから！ 感情があったら、戦えないって……」

イエロは想いを絞り出すようにして、声を張り上げた。その目からは透明な雫がポロポロと零れおちる。

「あわわわ！ な、泣くな！ 感情があるのは悪いことじゃないよ！ 俺は無表情なヒーローより、喜怒哀楽持ったヒーローの方が好きだ」と、リヒトは胸を張り、「あ、けどイエロは女の子だからヒロインか」と、小さく笑った。

啞然としながらリヒトを見つめるイエロ。目の前の少年の笑顔は、とても輝いている。決して自分の為に嘘をついたわけではない、そうわかった。

リヒトの優しさに、顔をほんのり赤くして微笑むイエロ。

「――ありがとう、リヒト。でも、リヒトのこと巻き込めない。迷惑かけたくないよ」

イエロは眉を寄せて、リヒトの瞳を覗いた。

「けど、あいつも俺のこと知ってるわけだし――ここで家に帰るより、イエロと逃げた方がいいと思うんだよな。絶対、政府の奴ら俺の家に来る……」

リヒトは言葉を止めた。その表情は深刻そうに歪む。イエロも同じような表情をした。二人の頭の中には同じ考え。

「――アイデア！」

絞り出すように声を出すリヒト。もしかしたら母親が危ないかもしれない。その考えが初めて浮かんだ。政府の奴らは母を脅すかもしれない。

「――戻ろう」

イエロは真剣な目でリヒトを見た。頼りない表情はどこにもなかった。

「俺だけ戻る。イエロは逃げろ」

リヒトも真剣な目でイエロを見つめた。

「うん。リヒトは私の初めての友達だもの――一緒に行こう。戦う、全力で。リヒトを守りたい。リヒトが大切に想うものも守りたいよ、一緒に」

そのイエロの言葉は、リヒトの胸に触れる。リヒトは照れたような表情で笑い、「うん、頼むよ――イエロ」と、深く頷くのであった。

*

「アイデア！」と、リヒトは叫んだ。

家の中に飛び込む二人。しかし、そこにアイデアの姿はない。室内に争ったような形跡はなかった。

「どこだ？ どこに……」

「――待って」

イエロは目を瞑っている。そして、静かに目を開く。その瞳の中の紫の星。――何かの能力を使うようだ。周りの空気が動くような感覚がした。

「――ありがとう」

少しするとイエロが口を開いた。

「どうしたんだ？」と、不思議そうにイエロを見るリヒト。

「――これが私の能力。声なきものの声を聞くの。今、空気のを聞いたわ――確かに政府の奴ら、ここに来たみたい。だけどアイデアさんに乱暴はしてない」

イエロの瞳の中の星が弾けるように消える。

「ここから先は風が私たちを連れてってくれるわ」

イエロも悪戯っ子のような表情を浮かべて、リヒトを見て笑うのであった。

*

「ありがとう、風さん」

イエロは小さく呟いた。二人は静かにその場所へ降り立つ。そこは一一星の子供を製造する研究所だった。二人を運んだのは、イエロに従った優しい風。

「なんだろ、変な感じがする」

リヒトは呟いた。

「一一だよ。たぶん、命を造ってるからだ。無理やりに造られた命が悲鳴を上げてるんだよ一一だから、変な感じがするんだと思う」

感慨深げな顔で研究所を見上げるイエロ。思いのほか、研究所は静寂に包まれていた。

「行こう。ここにアイデアさんはいるよ」 イエロはリヒトの手を引張り、研究所へ足を踏み入れるのであった。

*

「何か、凄い静かだな。まさか、罨？」と、リヒトは研究所の廊下で呟いた。二人の足音と呼吸音だけが存在する廊下。

「罨でも何でも、二人のことは絶対に助けるよ。絶対に」

イエロは決意に満ちた表情で言う。

「信じてる、イエロのこと。だけど、俺も絶対イエロのこと助けるからさ」

「一一ありがとう」

感激したような表情で微笑みイエロ。一一刹那、廊下の奥から話し声が聞こえた。

二人は顔を見合わせ、足音を立てないように走った。

廊下の奥には大きな扉があった。その中から話し声が聞こえる。

扉に耳をつけるリヒト。

「アイデアの声もする」と、小さく言った。

「じゃあ、入ろう」と、二人は扉を推した。

「一一リヒト！」

驚きの声を上げたのはアイデアだった。特に乱暴をされたような形跡はなかった。リヒトが安堵の息をつく。

「リヒト、来るな」

厳しい表情のアイデア。珍しく煙草は吸っていなかった。

「おやおや、この子が――星の子供、だね？」

そんな言葉を発するのは、どうやらこの研究員の者らしかった。とても嬉しそうな表情で二人を眺めている。しかも、喜ばしくないことにその研究員のそばにはNO. 2が控えていた。

「さっさと母ちゃんを返せ！ あと、イエロのことも分解さないでくれよ！」

リヒトは叫んだ。

「いいから、リヒト。さっさと逃げろ！」

逃げろ、と連呼するアイデア。我が子を守りたい、それ以外の感情も交じっているように見えた。

「アイデアさんも無事に帰しましょう。イエロ――NO. 13のことですよ？ その子も分解しません――だから、君はここに留まりなさい」

研究員は好奇心に満ちた目でリヒトを見やる。

「それは、いいけど――どういうことだよ？」

リヒトは不思議そうに研究員を見上げた。

「それは、ね」

とても愉快そうに口の端を歪める研究員。

「やめろ！ その先、言ったらぶっ殺すぞ！」

乱暴な言葉を吐くアイデア。研究員に掴みかかろうとする。

「やめてくださいよ、アイデアさん。――いや、天才科学者のイディアナ＝ローシュマン博士とお呼びした方がいいですかね？」

アイデアは研究員の胸倉を掴み、一発殴ろうとした。

しかし、研究員の傍に控えていた『星の子供』にその手を止められる。

「どういうことだよ、アイデア」

悲しそうな目で母を見つめるリヒト。

勝ち誇ったような表情でリヒトを見る研究員。

「君、『星の子供』なんだよ。よろしくね、NO. 1」

「貴様！」と、必死に殴ろうとするアイデア。

イエロはそのときわかった。NO. 2から逃げられたのは自分の力ではなく、リヒトの力だったのだと。

「ショック？ そうだよ、この人は母親じゃないんだよ。いや、君を造ったという意味では母親なのかな？ ずーっと、君を騙してたわけだよ。母親面してたわけだよ」

勝ち誇ったように笑う研究員。リヒトは頭を下げている。

「リヒ、ト」

イエロがリヒトの肩に手をかけようとした。ショックを受けているのだと思った。

――しかし。

「はははは！ バーカ！」と、大口を開けて笑うリヒト。まさに腹を抱えて笑っている。

その場の全員は驚きの表情を浮かべている。

研究員に至ってはその事実に狂ってしまったのかと思っているようだった。

「アイデア！ 俺のこといつも馬鹿って言ってるけど、結構頭いいんだぜ？」

今度、勝ち誇ったように微笑んだのはリヒトだった。真横に右腕を上げる。

「何となく、気づいてた。俺が普通じゃないことくらい。――覚えてるか、アイデア？ 俺が五歳も上の奴と喧嘩して勝った時のこと。あの時、異常だ……って思うくらい自分の中に力が湧いたんだ」

――リヒトの両目に、黄色い星が浮かぶ。

「俺の中の『命』が、力を溢れさせたんだ。――ほら、見せてやるよ。俺の能力を」

リヒトは前に右手を翳す。両目の星が、輝いた。

右手から溢れる、星。星は空に浮かぶように、ゆらゆらと動いた。研究員の横を過ぎ去り、だいたい離れてから動きを止める。皆、息を飲んだ。

――響く爆音。

研究所の壁は砕け、外の青い空が見えた。

「俺の能力は『光を操る』ことだよ。『星の子供』にふさわしいだろ？」

リヒトの両目の星は、まだ輝いている。それを恐れ、後ずさる研究員。NO. 2も驚きのあまり動けないようだった。

「別にあんたらに攻撃するつもりないから。アイデア、イエロ行こうぜ」

リヒトはいつもの調子で言い、二人の手を引っ張る。

三人の背後で、研究員が声を上げる。

「全員、『星の子供』全員でリヒト＝ローシュマン、イディアナ＝ローシュマンとNO. 13を追え！」

「うわ、やばい」

リヒトは二人の両腕を掴み、飛んだ。

*

「ごめん、リヒト」と、アイデアは眉間に皺を寄せながら謝った。

「別にいいよ。結構楽しかったしさ、このまま三人で逃亡生活を繰り広げようぜ」

へらへらとしながら笑うリヒト。

「それは、無理だと思うよ」と、それは言った。

三人は気付く。

――周りを囲まれていることに。何十人もの『星の子供』。それは何の感情も持たない虚ろな瞳

で三人を見つめている。

「たった二人でこの人数には勝てないでしょ？ さっさと捕まえて感情を消してやるよ」

NO. 2は静かに言い放った。

「はは！ 何だよ？ まるで感情があるのが憎いみたいだな！ 自分達にはないからかよ？」と、リヒトは挑戦的に笑った。

「――感情があるなど、ただの欠陥でしかない」

氷よりも冷たいと思われる声で、NO. 2は言い放った。

刹那、星の子供たちが動く。

「行くぞ、イエロ」

「もちろん、リヒト」

二人はしっかりとお互いを見て、頷いた。二人の瞳に星が浮かぶ。

「アイデア、俺たちの間に居ろよ！」

リヒトは両手を前に突き出した。星が、溢れる。それは眩い閃光を放ち、弾ける。何人かの星の子供たちが膝をつく。

「こっちがガラ空きだな」

NO. 2はなめた表情でイエロに向かって行った。

「来させないわ。――眠る命、大いなる命。私はあなたの気配を感じてる。お願い。私に力を貸して！」と、イエロは叫んだ。

刹那、地が鳴った。何かが溢れ出るような――

「なっ……！」

NO. 2は目を見開いた。

イエロの前を囲む、深緑のもの。それは大昔に失われたと思われていた、『自然』と言うものだった。

「イエロ、お前凄いのよ！」

リヒトは無邪気な笑顔で叫んだ。アイデアもまさか、という啞然とした表情でそれを眺めている。

「私、今までこんな素晴らしいものの声を聞いてたんだね……大地に眠っている命に気づいてた、ずっと。緑色の命の存在に――」

イエロは優しそうな瞳を見せて、「こんな機械だらけの世界なんていないよ。ねえ――そうでしょう？」

「そうだな。俺達が居るべき世界は、こんな造られたものに溢れた世界なんかじゃない」

リヒトとイエロは手を合わせた。

「――俺達に、世界を返してくれ」

刹那、その都市は光に包まれた。アイデアは驚き、少し微笑む――我が息子の成長に。

「馬鹿リヒト――立派になりやがって」と、その口元を上げていた。

*

「アイデアー、どこに行こうか」

リヒトは言った。

「あん？ とりあえず寒いところは嫌だから南にでも向かうか？ ぶらりと歩いていこう」

アイデアは煙草の煙を吐きながら笑った。

「とりあえず私は煙草と——あとお前たちがいれば満足だよ」と微笑んだ。

「でも——皆大丈夫でしょうか。今まで機械だらけの生活に慣れていたのに、今それはないから……」

心配そうな表情をするイエロ。

二人が同時に世界を放った瞬間——都市の機械は全て新緑に包まれ、使い物にならなくなった

。「大丈夫だよ。あの自然だらけの場所には果物だってあるし、水もある。本来人間はそれだけで生きてきたんだから心配する必要は皆無……だろ」

ニヤリと笑うアイデア。そして言葉を続ける。

「それに失われていた星も輝きを取り戻した。リヒト——お前の力で。また人間の目に星の輝きが映るようになった。だからどんなに辛くても人間どもは希望を忘れないさ」

「はは、たまにはいいこと言うじゃん、アイデアー」

リヒトは笑って、アイデアを見上げた。

「うるさいよ、馬鹿リヒト」と、アイデアは言い、「ああ、あと——科学者としては、この先の結果も楽しみだよなあ」と、続けた。

「この先の結果？」

声を揃えるリヒトとイエロ。

「ああ、私がお前らの孫のばあちゃんになれるかだよ。星の子供同士から子供が生まれた、って話はまだないからさっ」

何ともおかしそうにアイデアは笑った。

「ふ、ふざけんなよ、ばばあ！」

リヒトは軽くアイデアの腕を叩いた。残念ながらまだ母の口には勝てないようだ。

三人は何となくふと立ち止まり、夜空を見上げた。

そこには確かに満天の星。星たちが三人に光を届ける。

「行こう。生き続けてる限り、進もうぜ」

リヒトは笑って、二人の手を引っ張った。

——まだ、星の輝きは終わらない。星は、この先もずっと人類の歩みを見つめ続けるのだろう、

とりヒトは確信するのであった――